

Nabokov の “First Love”

—海，渦，プリズムの考察—

竹 内 麻 子

はじめに

“First Love”（註1）は、Vladimir Nabokov（1899—1977）の回想の物語である。このタイトルは、単純に「初恋」と考えられるが、「初恋」を逆に英訳すれば、通常“the first love”又は“one’s first love”である。このタイトルは、定冠詞も所有代名詞も持たない＜first love＞であり、一種の抽象名詞とも考えられる。つまりそれはNabokov個人に限られた初恋ではなく、一つの抽象的な《初恋》という観念を意味すると考えられるのである。本稿では、このタイトルの持つ観念性が、テキストの性格をある仕方代表しているという前提のもとに、《海》、《渦》、そして《プリズム》のイメージについて考察する。

A

周知のとおりNabokovは、アメリカ作家として位置づけられている亡命ロシア作家である。“On a Book Entitled *Lo/ila*”（註2）のなかで自ら述べているように、彼は母国語（ロシア語）を失うという不幸に見舞われた。彼が自らのアイデンティティを所有するための一つの手続きは、imaginationによる観念の世界への逃避である。これは彼にとって、自己の存在を確かめるために必要な手続きであったと考えられる。

Nabokovが幸福だったのは少年時代であり、その失われたノスタルジーを求める心は、過去を美しく、神秘的に再現しようとする。そこには、一つの宇宙、凝縮された世界が見いだされるのである。

このテキストでは、過去の記憶を取り戻すために、幾つかの要因と考えられるものが指摘できる。第一に、Nabokovの心中にある、ぼんやりとした、明確な形をとらない過去のイメージ（これが記憶再生の土台＝プラットフォームとなる）。第二に、そのイメージの中に表われる色、光、影。第三に、Nabokovの文体に見られる、あたかも時の流れを象徴するような、流れるリズムと連想作用を促すような言葉の表出である。テキストは、大まかに言って、以上の三つの要素が相互に作用し合い、最後に一枚の絵が完成する、という仕組みになっている。これらの記憶再生要因は、瞬間において捕えられる、という傾向がある。例えば光に関する描写についても、いつまでも光り続ける光ではなく、瞬時にきらめく光である。また蝶に関する描写が六回見られるが、蝶のイメージは、いわば、移り気な炎であり、夢のようにさまよってきては、ゆらゆらと消えていく存在である（蝶は断片的な姿しか見せない、はかなさを象徴すると考えられるだろう）。蝶は、Nabokovが生涯愛し続けたものの一つであり、テキストに登場する蝶は、彼が愛したフランス人の少女Coletteであり、＜first love＞の象徴と考えられる。

At a tremendous pace astray Clouded Yellow came dashing across the  
palpitating plage. (p. 47)

この引用は、海辺に突然現われた蝶の描写である。飛び方は直線的で、海鳥のようである。そこには小さな命の意志がある。重要なことは、この蝶が所有不可能な蝶である、ということである。Clouded Yellowは、淡い黄色の羽を持つ蝶であると考えられるが、これはColetteの登場を暗示する。その蝶その物よりも、サウンド、つまり、Cloudedの、〈k〉が、Coletteの〈k〉をNabokovに呼び覚ませたと見えよう（こういったNabokovの技法は後にも現われる）。彼は、バスク語での蝶を、*misericoletta*と聞き違える。これは間違いなく、*misery Colette*（「あわれなコレット」）を読者に連想させる。

色、光、影、といった実体の把握不可能なものについて、Nabokovが（英語で）書き、考えるうちに辿り着くのは、Coletteとの思い出である。*first love*が文字どおり、初めての恋であるならば、Coletteは初恋の人ではないことはテキストからあきらかである。しかしあえて*first love*と題している。それは、おそらくNabokovの考える《初恋》のイメージが、Coletteとの恋に的中したものと考えられる（註3）。Nabokovにとって初恋は、ミニチュアの村を上から見下ろすように、思い出すものであり、それには*excitement*が伴うのであるといえよう。Coletteとの思い出には、そういった*excitement*、凝縮された何かがある、と考えられる。三章からなるテキストの中で、最初の二章までは、初恋とは程遠い回想が描かれている理由はそこにあるのではないかと考えられるのである。

第一章は、少年Nabokovの*excitement*についてである。彼の心は一挙に生れ故郷に飛び、Nevski通りでoak-brownの国際線用寝台車の模型を見ている（模型の理由は、大きすぎて把握できないものを凝縮し、総合的に捕えることを可能にし、所有欲を充たさせることにあると考えられる。）。車内はblueのシート、ピカピカのパネル、鏡などが詰まっている。ここでは、色、光、そして殊に《鏡》という象徴的な（何か意味ありげな）言葉が登場するが、この言葉から発する魔力はテキストの終りまで続くのである。次に彼が思い出すことは、1909年のパリ旅行の国際線用寝台車の車内である。寝台車のスピードは、少年Nabokovに様々な魔法を引き起こす。車窓に映る少年Nabokovと母の姿は、光と影に融合し、真黒な電線は生き物のように空高く上り詰めては稲妻のような一撃で落ちてしまう。そしておもちゃのような街路風景が車内に飛び込んでくる（ここで再びミニチュアを表現しているが、これは後で考えることにする）。これらは車内からの*excitement*と考えることができる。次に彼は、視点をずらし、車外でこの列車を眺めている自分を想像する。これは車外からの*excitement*であるが、これらの二重の*excitement*は物語の導入の機能を果たし、*excitement*はいろいろなイメージに発展して行くのである。次にこのテキストにおけるイメージの発展の仕方を三つの段階に分けて考察する。

テキスト全体に共通して登場するのは《海》である。まず第一章では、寝台車の魔力にとりつかれた少年Nabokovがイメージするものはblueの《海》である。Nevski通りで見た模型の寝台車には、blueのシートが貼られ、本物にはblueの絨毯が敷かれていた。blueの持つ連想作用が働いて、彼はこう考える。

The wide-windowed dining car, ... would be perceived at first as a cool haven beyond a consecution of reeling blue corridors; ... (p. 45)

これは本物の寝台車に《海》を見いだす場面である。ここではblueが彼に及ぼす作用の程が理解される。やがて寝台車に夜が訪れるが、少年Nabokovのexcitementは失われない。ここで、「眠り」が登場する。これを描くために、Nabokovは「寝台車」を用いたものと考えられる。つまり、Nabokovが、「眠り」というものが、経験を記憶に変えるということを意識していたのではないかと考えられるのである。「眠り」にはいる前の彼の瞳は、コンパートメントに映り、さまよう影の断片を追う。これは、失われたアイデンティティを追及する切ない姿と同質のものであると考えられる。《影》は、目に見えるが実体はないという点では光と同質のものである。Nabokovが過去の断片を蘇らせながら書くように、この《影》の断片は彼の記憶の断片であり、海底から見上げたときの海面に揺らめく太陽の光でもある。もし、このことをNabokovも考えたのなら、寝台車全体は彼にとって、《海》そのものとなる。これは次の箇所暗示されている。

Near the door that led to the toilet, a dim garment on a peg and, higher up, the tassel of the blue, bivalved night swung rhythmically. (p. 45)

ここでは再びblueが登場し、それによって彼はbivalvedという形容詞を用いたのだと考えられる。つまり、blueが《海》を呼び起こし、《海》が、bivalvedを引き出したことが一つ考えられるし、blueの〈b〉とbivalvedの〈b〉というサウンドの一致は偶然ではないと考えられるのである。

これらの《海》のイメージは、第二章で更に発展する。ここではピアリッツの海岸の記憶が細かく描写されている。ピアリッツの海岸で、偶然にも彼は、Clouded Yellowに出逢う。そして別の海岸では、蝶のバスク語を耳にし、これをmisericioleteaと聞き違う（ここはNabokovの*The Real Life of Sebastian Night*の最後の場面（註4）を想起させる）。第三章ではそれから更に発展して、愛するColetteと《海》で過ごした思い出が蘇る。

これらのことを考えてみると、blueがsea (=《海》)を引き出したと考えられるが、サウンドの面でもかなりseaは作用を及ぼしていると考えられる。ここでは、seaの〈s〉のサウンドを意識したと考えられる引用を羅列する。

- ① ... steadily playing on for steadily sparkling stakes .... (p. 44)
- ② ... I see shining the same, the very same, .... (p. 44)
- ③ ... silver under a similar .... (p. 44)
- ④ ... she slowly shuffled .... (p. 44)
- ⑤ ... shadoes, and sections shadows .... (p. 45)
- ⑥ ... sparkle-streaked .... (p. 47)
- ⑦ ... my favorite was not the small bull of black stone and not the sonorous sea shell but something which now seems almost symbolic .... (p. 50)

こういった〈s〉のサウンドが現われる箇所について観察すると、①から⑥までの引用はすべて、寝台車に少年Nabokovが乗り込んだときの描写に現われていることが理解できる。またこれらは、④のslowlyに対して少年Nabokovがspeedを感じているときに現われている。具体的に言うならば、①は寝台車が走り、その中では少年Nabokovと母とでランプをしているところの描写である。自分達が「静」であるのに対して、ガラスに映った自分達は「動」であることに気付く。次々とやって来ては流れ去って行く景色の中を、潜り込んだり、通り抜けたりしている、ギャンプラーと見て取るのである。そしてすぐに②と③の〈s〉のサウンドが現われる。つまり「動」(→ speed)を感じたとたんに、〈s〉のサウンドが高まってくるものと考えられる。視点を、母にずらすことで「動」は「静」に戻る。そして④の〈s〉が響くのである。やがて、寝台車に夜が訪れるが、少年Nabokovは、敏感に「動」の状態に自分が置かれていることを意識し、コンパートメントに映った、さまよう影を見つめる。ここで、⑤の〈s〉が登場し、⑥では、影から吊るされた着物と常夜燈へと視点がずらされ、疾走する夜の闇を考えたときの、つまり、少年Nabokovが次第に視点を外に向けていったときのspeedを意識した〈s〉の響きとなっていると考えられる。そして、これらのリズムカルな文体は、流れる《海》(= Sea)を感じさせるのである。

Nabokovは、《海》の場面で、ほとんどの場合plageとフランス語を使い、あえて英語を避けている(p. 49)(plageは工学用語としては、「等しい光を受ける面」を意味する)。両親との問題があって、少年NabokovとColetteは必ず海岸で会うことにしていた。彼ら二人だけの世界になれる海岸では、太陽の光は平等に二人を包み込んでくれるのである。それゆえ、plageと初恋とは強く結びついていると考えられるし、初恋の舞台はplage = 《海》であったのである。

《海》には、つまり深層心理学の領域ですでに解明されている(註5)、Great Mother

のイメージが読み取れると考えられる。その根拠として Great Mother が持つ特長を考えてみると、第一に、Great Mother の、文字どおりの母なるイメージである（「母なる海」）。第二に、Great Mother が、生と死を決定づけるものであるということである。この二つの特長は、先に述べた《海》の持つ万物を産み出す力と共通するものがある。第三に、Great Mother が吸引し、飲み込み、包含する力を持つということである。これについては、実際に、地母神の土偶に見られる渦巻き模様がその代表であるし、《渦》というイメージで私達の夢にも現われることが深層心理学で説明されている。また包含する力への意思は、すでに述べたように、少年 Nabokov が、大きな物体をミニチュア的に捕えようとしていることとも共通していると考えられる。そこで、次に、このテキストにおける、幾何学的イメージである《渦》のイメージを考察すると共に、Great Mother との一致性を考えることにする。

## B-Ⅱ

まず、テキストにみられる三つの《渦》のイメージを観察する。

And then, in my sleep, I would see some thing totally different -  
a glass marble rolling under a grand piano on a toy engine lying on  
its side with wheels still working gamely. (p. 45)

この引用は、どこまでも直線に駆け抜ける夜の寝台車の中で、少年 Nabokov がやがて眠りに入る時に頭に浮かんできたイメージである。①ガラスのおはじきがぐるぐる回る、②車輪がぐるぐる回る、と言った「回る」は、明らかに、《渦》のイメージを示している。しかしここでは、吸引するというまでの強いイメージにはなり得ていない。このイメージが、少しづつ発展するかのようになり、次の引用では、吸引され、一つの凝縮された世界が描かれる。

Like moons around Jupiter, pale moths revolved about a lone lamp,  
... there was nothing particularly interests in the portion of station  
platform before me, and still I could not tear my self away from it  
until it departed of its own accord. (p. 46)

これは少年 Nabokov が乗る寝台車が、ある駅で停車したとき、彼が excitement を抱きつつプラットフォームを見る場面である。ここで使われている“pale”は、少年 Nabokov の無意識の世界に潜む《blue》が作用しているものと考えられる。そして、Jupiter という言葉の使用からも窺えるように、彼は一瞬のうちに見たものを総合的に把握してしまう能

力を持っている。蛾が灯の周りを回るのはごくありふれた光景であるが、この《渦》のイメージは彼の目を捕えて放さないでいる（これは彼に何らかの作用を与えていると考えられる）。また、《吸引》というイメージでの蛾の描写は *Lolita* にも現われる。次に三番目、テキスト最後の《渦》のイメージが現われる引用を観察する。

... and instantly she was off, tap-tapping her glinting hoop through light and shade, around and around a fountain choked with dead leaves, near which I stood .... I remember, some detail in her attire ... that reminded me then of the rainbow spiral in a glass marble.

I still seem to be holding that wisp of iridescence, not knowing exactly where to fit it, while she runs with her hoop ever faster around me and finally dissolved among the slender shadows cast on the graveled path by the interlaced arches of its low looped fence. (p. 51)

これは、このテキストの最後の部分であり、テキストのテーマが集約されていると言えるだろう。これは Colette との別れの場面であり、記憶の世界から現実の世界に戻る微妙な瞬間を表現している。そして、Great Mother 的なすべてが詰まっているかのように考えられる。第一に、hoop に代表される《渦》のイメージである。Colette は、キラキラ光った hoop を回しながら dead leaves で詰まった噴水の周りを回り始める。《渦》が描く円は、永久に回り続けるであろう太古から永続する普遍的なイメージを連想させる。円を描くためには、必ず中心となるものが必要である。中心は影であり、円は光、影になる部分は、dead leaves (→死) であると考えられる。

第二に、Great Mother 的なものは、この dead leaves である。dead leaves は死を象徴する。Great Mother が持つ、生と死の両面性を、これはある仕方で表現していると考えられる。また、噴水は水であり、《海》へつながっていく。そう考えてみると噴水が象徴する、Colette との思い出の plage (→《海》→生) は、今や dead leaves (→死) に負けていると判断できる。そういった状況の中で、Colette は「光と影を縫って」光った輪を回しながら噴水の周りを回り、Colette の体は dead leaves と融合してゆく。この時、万物は、光と影になり、恐らく誰も立ち入ることが許されぬ、光と影へ Colette は吸い込まれていく。これは、第三の Great Mother 的なものである。つまり、飲み込み、包含してしまうことにおいて、Great Mother 的なものと一致するのである。

### B-III

振り返って考えてみると、Great Mother の最大の特長である、《包含》の原理は、この

テキスト全体に作用しているように考えられる。《包含》の原理は、一種のブラックホールであり、かつ現実を認識する方法でもあると考えられる。これをテキストに現われる順に列挙すると、以下ようになる。

(1) 寝台車の模型 (p. 43)。 (2) 走る寝台車から見える景色を、おもちゃに喩えること (p. 44)。そして、 (3) 観念的に寝台車の全体像を把握しようとする試み、であるが、これについては、以下に引用する。

I would put myself to sleep by the simple act of indentifying myself  
with the engine driver. (p. 45)

これは、寝台車で少年Nabokovが、自らを寝付かせるために試みたことである。寝台車に乗っている乗客、コック、車掌達の姿を想像し、寝台車全体の姿を把握しようとする。やがて、《渦》のイメージが沸いてきて眠りにつく。寝台車が走る、直線的なイメージをかき消すことで安心して眠りにつくのである。

更に、(4) 青白い蛾が灯の周りを回る様子を、木星とその衛星群に例えること (p. 46)。 (5) ビアリッツの海岸で、太陽の光を虫メガネで凝縮すること (p. 47)。 (6) ビアリッツで買ったペン軸の水晶の穴に小宇宙を見ること (p. 50)。そして、(7) 七色の描写、であるが、これは、色に限らず、七という数字もこのテキストに登場し、何か象徴的である。バスク語で、蝶を聞き、後でそれを調べたら七つ似た言葉があった、という事 (p. 48) と、iridescence (p. 48) rainbow (p. 51) という英語を使っていることである。七つに象徴される虹は、「総合」を象徴する。これも、ある種の《包含》の原理に一致するものと考えられる。しかし《包含》のもとにあるものこそ《プリズム》であり (私が今挙げた例も丁度七つである)、すべてがひとつに統合されたこのテキスト自体、一種の《プリズム》であるとも考えられるのである。また少年NabokovとColetteの出会いが、常にplageであり、それがひとつの原点になっていることを考えると (そして、plageがプリズムの「等しい光を受ける面」であると考えたと)、plageと《プリズム》、そして記憶の問題が浮かび上がってくるが、この問題は、非常に大きな問題であると考えられるので、別稿にゆずることにする。

Nabokovはこのテキストで、一つの世界を再現した。全体に渡ってテキストを支配してきた一瞬の光は、美であり、彼のノスタルジーを象徴するかのようである。彼が故郷を思い出すことによって無意識の世界に潜んでいたGreat Motherがにわかにテキストに現われたとも考えられる。

Nabokovは、寝台車の模型に心ひかれたが、売り物ではなかったので、手に入れることができなかった。そして、Coletteとも他人が考えた処置の結果 (p. 51)、別れなければ



ばならなかった。すべては、外界との接触で中断されてしまったのである。しかし、Colette の名に集約される Nabokov の幸せな少年時代は、この“First Love”によって永遠に続くのである。

## 註

- (1) …… “First Love” は、1948年に *New Yorker* に最初発表され、*Speak, Memory* の第七章にも収められているが、本稿では、“First Love” というタイトルを持つ一つの短編として Nabokov が考えたことを重視して、*Nabokov's Dozen* 版をテキストにした (Vladimir Nabokov, *Nabokov's Dozen*, Penguin, 1987)。なお以下本文で、ページ数のみを挙げたものは、この書からの引用である。
- (2) …… Alfred Appel Jr., *The Annotated Lolita* (McGraw-Hill Book Co., 1970), 313-319.
- (3) ……これに関しては、*Lolita* とのアナロジーを認めざるを得ない。Humbert にとって、*Lolita* は、初恋の女性ではなかった。彼にとって初恋の女性は、Annabel (やはり彼女とも海岸で出逢うことになる) であり、彼女との遂げられぬ恋の想いが、*Lolita* に的の中するのである。
- (4) …… *The Real Life of Sebastian Knight* の語り手 V は、Sebastian を探す旅に出るが、小説の最後で、暗やみの中で、彼に出逢ったと誤認する。  
'Oh-la-la!' she exclaimed getting very red in the face. 'Mon Dieu! The Russian gentleman died yesterday, and you've been visiting Monsieur Kegan ... (*The Real Life of Sebastian Knight*, Penguin, 1982), p. 172.
- (5) ……『無意識の構造』、河合隼雄著、(昭和52年、中央公論社) 69-84。